

やどりき対談

継承を、引き継ぐ。

「寄神社という場を守ること」

寄神社総代会長

前寄神社総代会長

ヤドロク編集長

飯田 洋一 × 熊澤 哲 × 石井 久和



向かって左から、石井久和 (YADLOG 編集長)、熊澤哲さん (前寄神社総代会長)、飯田洋一さん (寄神社総代会長)

気づいた時には、もう限界だった

石井 今日「寄（やどりき）」の伝統を守り続ける男たち」というテーマで、お話を伺えればと思います。よろしくお願いします。

飯田 寄神社の総代会長をやっています、飯田洋一です。前会長の熊澤哲です。今は神輿の修復を中心に関わっています。

石井 まず、今回の神輿修復の話から伺いたいのですが、きっかけは何だったのでしょうか？

熊澤 例祭がコロナで5年止まったでしょ。で、再開して出したらね、壊れたのですよ。神輿が神社に帰ってきたら、あちこちがボロボロで。

飯田 それまでも壊れてはいたのです。ただ、その都度ちよつと直して、なんとか使っていた。でも今回で一気にボロが出てきた。

熊澤 分解してみたらね、想像以上だった。木は腐っているし、鎖もボロボロ。鳥居の下なんて、触ったら崩れそうな状態で。

石井 それはもう、限界だったと。

熊澤 そう。だけど、それまで気づいてなかったのよね。神輿は「出して、使って、しまふ」それだけだったから。

買うか、壊すか、直すか

石井 復するにあたって、業者に頼むという選択肢もあったと思うのですが。

飯田 見積は取りましたよ。でもね、高い。一番安くても1千万以上、大きいものだと1千700万。熊澤 紐だけで90万だからね。もう笑うしかない。

熊澤 でも結局、地域がなくなったら、個人も成り立たない。それを今、みんな感じ始めているんじゃないかな。

それでも、祭りは人を集める

石井 それでも、お祭りの日には人が大勢集まると聞きました。

飯田 集まりますね。若い人も帰ってくる。

熊澤 やっぱ祭りには特別なんだよ。高揚感がある。確かに。

熊澤 でもその「高揚」を知らない人が増えている。小さい頃から触れてないから。

石井 なるほど・・・。

熊澤 だからこそ、今やらなきゃいけない。一回途切れたら、戻すのは大変だから。

継承は、「開くこと」から始まる

石井 外の人が関わることについては、どう思われますか？

熊澤 大歓迎だよ。

飯田 在住じゃなくてもいい。在勤でもいいし、週末だけ地域にあそびに来ているような人でもいい。

石井 まさに僕みたいな関わり方ですね。

熊澤 そういう人が増えた方がいい。茶畑でも、草むしりをやりたいって来る人がいるのですよ。

熊澤 いるんだよね、そういう方。

石井 だから、僕らが思っている以上に、関わりたい人はいる。

飯田 その受け皿を作れるかどうかですよ。

石井 それは現実的ではないですね・・・。

熊澤 だから結論はひとつ。「自分たちでやるしかない」。

飯田 潰すわけにはいかないですからね。地域の記憶そのものなので。

熊澤 俺なんか小学校の頃から担いでいるのだから。あれがなくなるなんて考えられないよ。



足りないのは、お金じゃなくて「人」

石井 修復もそうですが、運営全体としての課題は何ですか？

飯田 一番はやっぱり資金です。氏子さんの数も減っていて、納入も3〜4割はない。

熊澤 でもね、本質はそこじゃない。一番は「人」だよ。

石井 人？

熊澤 人が多ければ、負担は分散できる。人が減ると、全部が重くなる。

支える人を、増やしたい

石井 最後に、この対談を読んだ人に伝えたいことはありますか？

熊澤 お金じゃないんだよ。

石井 お金じゃない？

熊澤 支えてくれる人。それが一番大事。

飯田 関わり方は何でもいいのです。来るだけでもいいし、少し手伝うでもいい。

石井 なるほど。

熊澤 人が増えれば、続く。人が減れば、なくなる。

石井 シンプルですね。

熊澤 だから、来てほしいね。

対談を終えて

神輿は、重い。けれど、本当に重いのは「継承」なのかもしれない。担ぐことよりも、受け取り、次へ渡していくこと。その見えない重さを、彼らは引き受けている。それでも彼らは言う。「人がいれば、続く」と。その言葉は、どこか春を待つようでもあった。けれど、この場所には、途切れることなく積み重ねられてきた時間がある。静かに続いてきたその営みが、また次の春を迎えていくのだと思う。



地域があって、個人がある

石井 昔と今で、一番変わったことは何だと思いますか？

熊澤 「つながり」だよ。

石井 つながり。

熊澤 昔は、もっと小さい単位で集まりがあった。畑で会って、お茶飲んで、話して。そういうのが日常だった。でも今は、それがなくなった。

石井 なぜなくなったのでしょうか？

熊澤 そういうものを「古い」しきりとして手放す時代があった。それが「新しい」とされていた時代でもあった。

石井 ……。



寄神社例祭 現地レポート

「また来年も、この場所で。」

3月第一土曜日。「寄神社例祭」には、寄地区で暮らす人、そして遠く離れた場所から「おかえり」「元気になって？」というあたたかい声に導かれて帰ってきた人々が集います。賑わう境内で、私たちは、集まった方々に質問を投げかけました。ボードに書かれた短い言葉から見え隠れする、一人ひとりの寄への想い。今この瞬間の輝きを、未来の寄へ繋ぐ記録です。

